寺町界隈

TERAMACHI-KAIWAI

わたしたちの町の、わたしたちの情報誌。1月号

■発行／寺町のまちづくりを考える会事務局☎21-3461

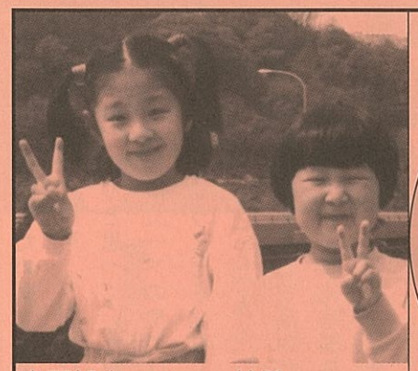
■January 1996 ■Volume 13

'96 春賀

あけましておめでとうございます

未来の看板娘

駅本通り商店会のお嬢ちゃんたちです。
本年もよろしくお願いします。



小西加奈ちゃん(8才)・美希ちゃん(7才)
■「こにし」

増原麻衣ちゃん(11才)・亜衣ちゃん(5才)
■「スイング」

高木美穂ちゃん(5才)
■「タカキ楽器」

原田優子ちゃん(9才)・真由美ちゃん(7才)
■「ぷちえーる」

鳴千絵ちゃん(9才)
■「プロデュース・シティ（当会のコンサルタント）」

錦織悠ちゃん(4才)
■「錦弘堂食品店」

寺町の男たちへ

寺町のまちづくりに期待しています！

ここ一年あまり、毎月『寺町界隈』というミニコミ紙が配布されてくる。作っているのは、『寺町のまちづくりを考える会』という地元の組織であり、どうやら商店会の若手メンバーが中心となって活動しているようだ。聞くところによると、彼らは〝出来るだけ無理なく、しかも現実的な方法で、この町を良くしていこう〟というのを基本にしているらしい。

この、〝出来るだけ無理なく…〟というところが気に入った。仕事柄、全国至る所に出かけ、まちづくりの成果なるものを目にする機会がある。大抵の場所に共通するのは、〝何でこんなに無理をして〟という思いである。

ほとんど人が通らないのに、どうしてこんなに立派な石畳舗装がいるのか？誰も利用していないのに、どうしてこんなに立派な公園が必要なのか？どうせ税金なんだろうけど、それは元はと言えば自分たちのお金ではないのか。

観光客が通るとか、歴史的な町並みでもあるのならともかく、人が通らないのであればアスファルト舗装で十分ではないか。公園を作るのは良いことだ。しかし、誰も通らないところに公園を作っても利用者がいるわけではない。

その上、〝救いがたい〟と思うのは、そうした計画を策定するのが、住民全体のまちづくり組織であったりすることだ。『計画は華々しくなくてはいけない』、『どうせ税金で整備して貰うものだから』、『この地域だけが良くなればいいんだ』等々、どこか自分本位で地域本位の醜さが顔をのぞかせる。

ところが、『寺町のまちづくりを考える会』は、〝出来るだけ無理なく…〟をテーマにしているという。不必要に華美な整備をやめて、目立たなくても必要な整備をやっていこうとしている。派手な舗装をしたり、やたらと彫刻を置いたりするのではなく、住民のための街灯や防火水槽の設置などを優先して考えている。どうせ税金だからという感覚もない。むしろ、お役所に頼るのは、どうしても必要な部分だけで、その他は出来るだけ自分たちの力でやっていこうとしている。

その表れが、寺町界隈という毎月発行されているミニコミ紙だ。専属のスタッフでもいるのならともかく、自分たちで仕事のかたわらに月刊誌を作るのは、並大抵のことではないと思う。私に出来るかと聞かれれば、一～二回ならともかく、彼らのように二年近くも作り続けることはとてもできない。議員さんを始め、過去に各界の著名な方々が投稿されているのは、おそらくそうした地道な努力を買われてのことだと思う。

『寺町のまちづくりを考える会』の活動は、今後の松江市のまちづくりの一つのモデルとなるような気がする。元々、住民全員が諸手をあげて賛成する計画などと言うものは、価値観の多様化する現在において、まず不可能だ。しかし、彼らの地道で気負うことのない、皮膚感覚を大切にした、本音の活動は、今後の結果はどうあれ評価してやるべきである。

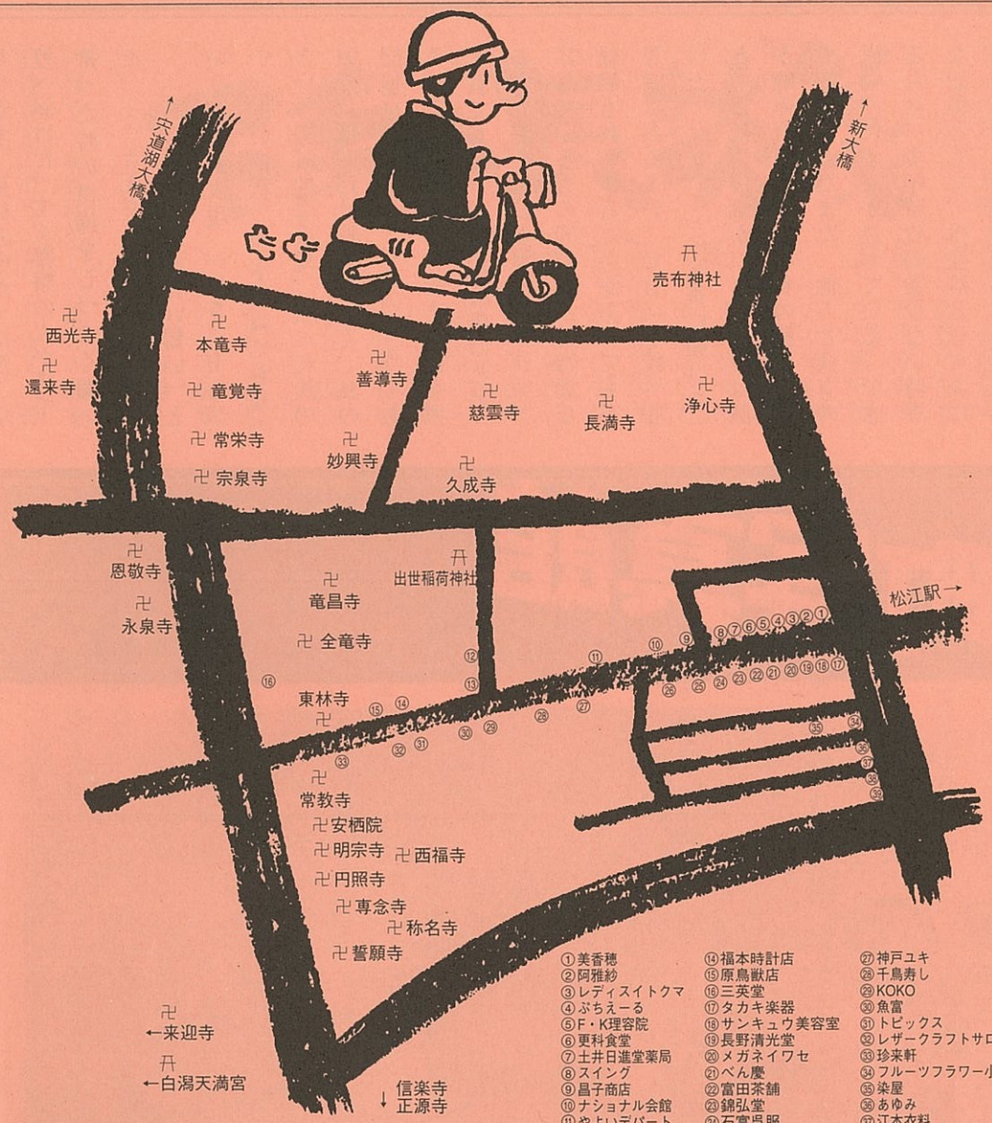
付け加えるならば、寺町という地域に対する愛着こそが彼らの原動力であり、自分の利益よりもその愛着を優先させているからこそ、他人から見れば馬鹿みたいに思えることや、批判の矢面に立つようなことを進んでやっているように思われる。

私は、大多数の人々と同じく、自分からまちづくりに参加しようとは正直思わない。できれば傍観者でいたいと思う。また、私にも世代感覚の違うせいか、反対はしないものの、賛成とはいいかねる点もある。

しかし、結果はどうあれ、我々の町にこうした若者が育っていたことを心から喜び、率直に自慢したいと思っている。今、我々のなすべきことは、自分に理解出来ないからと安易に反対することではなく、彼らを信頼し、君達でやってみろと任せてやる度量を持つことではないだろうか。

仮名 寺町見届け人（五八才）

松江 寺町界隈 てらまちかいわい 地図



編集後記

▽僕が担当すると、どうも気真面目になってしまいます。もっと遊びがなければと思うのですが…。（表紙担当・錦織）

▽私の店では有難いことに、若い人がよく働いてくれる。朝から晩まで、雨の日も風の日も、がんばってくれる。すばらしいとおもうのは、彼ら、彼女らが、常に若者らしさを失わず、常に前向きでいることである。

街も同じ、若者たちが行き交い、前向きである街、そんな街にするにはどうしたら良いか、まだ模索中である。ただこれだけは確か、みため、や体裁ではなく、主人公は常に「人」である。そんな街ができないものか。

できることを信じ、前向きでありたい。（尾郷）

▽先日、市長さんとの懇話会の折り、市内巡回バスのお話をお聞きしましたので今回は公共交通機関について。

最近旧市内に古い家を壊して駐車場にするところが多く、特に駅南口周辺は駐車場だらけという感じがします。車社会なのでしょうがないのかもしれませんがこれは、街が発展している姿なのでしょうか。公共交通機関の整備で駐車場の問題が若干でも緩和されることを期待しています。（高木）

▽師走に入り、忘年会シーズンたけなわ、酒を飲むと付き物なのが二日酔、あの苦しさは何とも言えず、酒なんか二度と飲まないぞと思われた方々も多いことでしょう。

でも凡人は弱いもので、二～三日もするとあの苦しさもきれいさっぱり忘れてしまい、次の飲み会が気になるもの。

今年は、官官接待の自粛で東本町、伊勢宮とも元気がないようです。健康には十分気を付けながら売上ちに皆んなで貢献しましょう。（中村）

「掲示板」記事募集！ 皆様に自由に使っていただく掲示板です。話題や情報、ご意見など、どうぞご自由に利用ください。送り先は事務局までどうぞ。

寺町のまちづくりを考える会
事務局 〒690 松江市寺町199 錦弘堂食品店内
TEL21-3462 FAX21-3461

寺本薫ちゃん(13才)
■「寺本建築都市研究所（当会のコンサルタント）」

富田美那子ちゃん(7才)
■「富田茶舗」

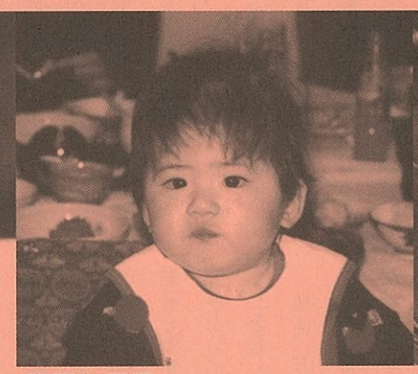
長野聡子ちゃん(7ヶ月)
■「長野清光堂」

尾郷友香ちゃん(14才)・友美ちゃん(12才)
■「更科」

富田真樹子ちゃん(4才)
■「富田茶舗」

中村真弓ちゃん(14才)
■「日本海観光(株)」

昌子桜子ちゃん(3才)
■「昌子商店」



富田友里子ちゃん(10ヶ月)
■「富田茶舗」

手塚まことちゃん(1才)
■「日本海観光(株)」

ご自慢のお嬢さんの写真募集!!

今後、寺町界隈の女の子さんの写真をシリーズで掲載します。
掲載ご希望の方は、詳細を事務局までお問い合せ下さい。

下手の長談義

Part Ⅲ　長谷川　良睦

人間の記憶には、〈一〉人と共有する記憶と、〈二〉個人の「私の秘密」風の記憶とがある。また、〈三〉不確かなことを時間の経過の中でそうであったと思い込み、それが事実であると確信するようになる記憶がある。とすれば、前号に書いた狛犬銃撃の件は〈二〉の型に相当するかもしれない。そして、同じく前号の列車銃撃の件はさしずめ〈三〉の型で、案外脚色した部分のある記憶かもしれないが、しかし、私の頭の中では「確か」なこととして記憶している話である。

ところで、執筆のため県立図書館に赴いたと書いたが、その折に、今まで〈二〉の型と思っていた記憶が、実はそれは〈一〉の型ではないだろうかということを発見した。それはこういうことである。

日本近代史の辞典として高い評価を得ている京大国史研究室編纂の日本近代史辞典に、昭和二十年八月二十四日に起こった「松江騒擾事件」が記載されているが、これは皆さんによく知られている終戦直後の島根県庁焼き討ちを中心とした一連の事件であるが、県庁焼き討ち、県知事の暗殺計画、検事正の暗殺計画についての記述のあとに、「…黒っぽい人影はほかでも動いた。松江郵便局にはダイナマイトが仕掛けられる。電話施設を壊し、松江と外部との連絡を断つためであったが、操作が悪かったのか、導火線が燃えただけで不発に終わった。…」とある。これに関わる話である。

ある日（辞典から察すると、八月二十五日だろうか）、郵便局（今のスティックビル）の南側に、建物疎開での瓦なのか瓦が窓際にな

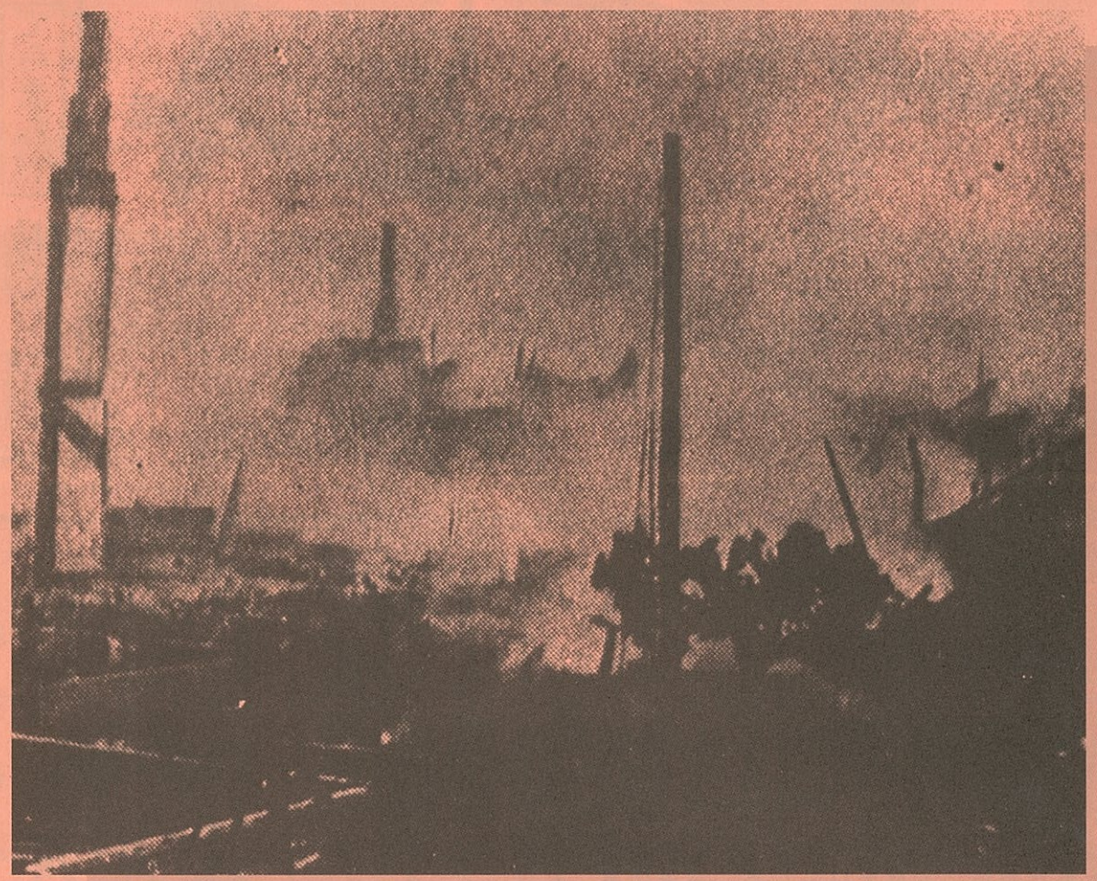
がく連ねて積み重ねられていた。何のためその上を通ったか記憶にないが、中ほどあたりの窓下の換気口に瓦で半ば隠したように新聞包みがあるのを発見した。手にしてみると形の記憶はないが、油のようなものがジュワーと滲み出る油揚げみたいなものと焦げた電線みたいなものであった。怪訝なまま家に持ち帰って、多分母親にいわれたと思うが、交番に届けることにした。その頃、交番は新大橋南詰を東に向かって直ぐの、今の御手船場の伊勢宮会館の辺りに、消防署と一緒にあったと記憶している。そこの交番にその得体の知れぬものを持って行ったが、取り調べられたり、しつこく訊問されたりした記憶は皆無だが、ダイナマイトだと教わって驚いた記憶が鮮明に残っている。つまり、先程の「松江騒擾事件」に関わった思い出ということになる。

ところが、このことを今まで〈二〉の「私の秘密」風の記憶としていたが、図らずも県立図書館で、これについて共有している人がいるのを知って驚いた。奇しくもその御仁は当時人参方に住まいし、晩年民間放送局のお偉いさんになった旧友の故M・K氏である。

私が見付けた書物は、「新聞に見る山陰の世相百年」（昭和58－山陰中央新報刊）である。関係箇所をやや長いが引用してみると、M・K氏の談として「…八月二十五日午前、郵便局の床下の換気口付近で奇妙なものを見付ける。長さ二十センチばかりの丸い棒状のもので、四本束ねてあり、そばに焦げた針金のようなものがあった。小型のバトンのようなそれは、もう忘れかけていた甘い匂いがし、なめるとほのかに甘かった。ポケットに納めたが、どうにも落ちつかず、夏休み中だったが、学校へ届けた。すぐ警察の人が来て、拾った時の模様をしつこく聞いた。…」と記されている。

「忘れかけていた甘い匂い」という文学的表現、「長さ二十センチ、丸い棒状、四本束ねてあり」という実証的な表現、M・K氏の頭の記憶回路は特別らしく、私の記憶は色褪せてしまいそうである。それにしても、あまりにも似た話である。白潟本町をはじめ、この界隈を遊びのホームグランドにしているもの同志だから特異な経験も共有することがあっても不思議はあるまい。でも「学校へ届けた」に対し、「交番に届けた」という記憶、細かいところでは話が噛み合わない。「私の秘密」にするか、はたまた、他人と共有の思い出にするか迷っている。できるなら、少年時代の数少ない特異な記憶として、得意然として人に語りたいと不遜な気持ちになるのも人情だろう。M・K氏に会って確かめたいが、幽明境を異にしているので適わない相談である。

寺町写真館



松江騒擾事件

写真提供／山陰中央新報社